小沼組絵図かわら版

奥深し 裏にひかれた「糊（のり）」のこと

みなさん、こんにちは。上の写真が、五月末に修復に出した村指定文化財の「耶麻郡小沼組絵図」です。今までは桧原歴史館に展示してありました。

「耶麻郡小沼組絵図」は、江戸時代の大塩・北山・熊倉(現・喜多方市)の様子が描かれた絵図です。縦約2メートル50センチ、横約1メートル30センチほどのかなり大きな紙に、各集落や地形の様子が詳しく書かれています。

今回は前回に続いて修復をお願いした茨城県水戸市にある表具店「泰清堂(たいせいどう)」さんの店舗にお邪魔して修復の様子を見学した際、目についた「糊」について伺いました。

泰清堂さんに聞いてみよう🔦

----以下、泰清堂さんとの会話です(敬称略)----

公民館:おや、そこにあるのは糊ですよね?

泰清堂:はい、そうです。でんぷん糊を自分たちで焚いて使っています。1回目の裏打ちに使う糊は炊きたての糊を使いますが、何層にも重ねていく時の糊は「古糊(ふるのり)」といって、何年も寝かせた糊を使います。

公民館:糊にも使い分けがあるんですね。知りませんでした!

泰清堂:大寒(1月20日頃、一年で最も寒いといわれています)の頃、糊を甕に仕込んで10年経ってから使います。

公民館:10年ですか?古糊はそんなに寝かせるものなのですか?

泰清堂:あえて粘着力を落とすためです。また、カビや雑菌が一時は増えるんですが、10年経つとそうしたものも殆ど無くなるんです。

公民館:10年寝かせることでカビなども落ち着いてしまうんですね。接着力もある程度は残ると…。

泰清堂:粘着力をあえて落とすことで掛け軸が柔らかく仕上がるんです。糊を効かせたワイシャツはパキパキして痛いじゃないですか。伝統的な作業をしている店はそれぞれ古糊を持っていると思います。

作業場に置かれていた糊。でんぷん糊、年末大掃除の時、障子張替えで使ったなあ…。と、なつかしさもあって質問したら驚きの展開が待っていました。

公民館:ちなみに1回に作る量はどのくらいなんですか?

泰清堂:1斗入る甕(かめ)で3~4個分ほどです。一日がかりの仕事です。

公民館:1斗というと単純計算で約18ℓですから、3~4個分となるとすごい量ですね…。大寒は最も寒い時期ですし、糊も大量に練るとなれば重くなるでしょうし重労働ですね。でも、文化財の修復を手掛けるとなれば、「伝統的な工法や材料で修復をおこなう」という部分も重要になると思います。皆さまの作業ひとつひとつが伝統文化を支えているんですね。

修復材料の糊ひとつでも奥深い世界があることを知りました!